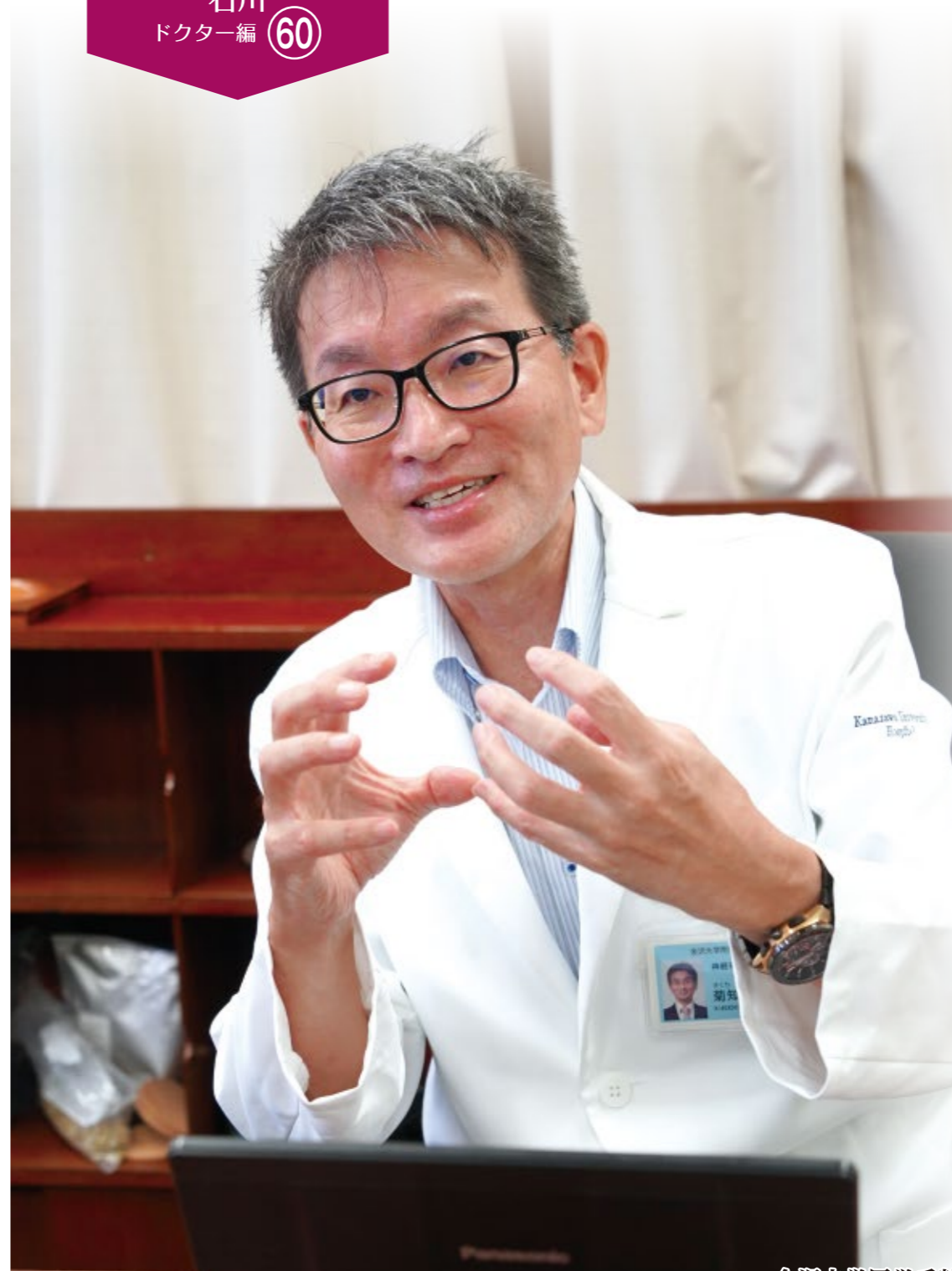


発達障害は、病気でなく個性 みんなが自分らしく 生きられる社会に



金沢大学医学系精神行動科学(精神科)教授
金沢大学附属病院神経科精神科診療科長

きくち みつる
菊知 充氏

1994年 金沢大学医学部卒業
1999年 金沢大学大学院医学研究科修了
金沢大学附属病院神経科精神科をはじめ、福井県立病院などの精神科で診療にあたる
2004年 ベルン大学附属精神病院精神生理学教室客員研究員
2005年 金沢大学医学部附属病院神経科精神科助教
以降、同准教授や子どものこころの発達研究センター特任准教授などを経て現職

最近よく耳にする、発達障害という言葉。ただ、それがどのようなことを正しく理解している人は少ないようです。長年子どもの心の問題に向き合い、世界に先駆けた研究を進める金沢大学の菊知教授に、発達障害について教えていただきました。

人とは違う特性を持つ子らが
イノベーションの原動力にも

発達障害は障害の状況が人によってさまざまで、みなさんの身近な存在でもあります。たとえば、対人関係が苦手な強いこだわりを持つことの多い自閉スペクトラム症(ASD)の子どもは、50人中に1人はいると言われていますし、注意力が欠如して落ち着きのない多動性障害児は20人に1人。どの学校でもクラスに1人か2人はいる勘定になります。

それから、知的な問題はないのに読み書きや計算ができない学習障害児や、運動が苦手な発達性協調運動障害児。また、感覚が繊細すぎて味や匂い、光や音などに過敏に反応してしまう子どももおり、多様な障害が複雑にオーバラップしている点も発達障害の特徴です。

発達障害は病気ではありません。一つの枠に収まりきれない「個性」です。だから、それをうまく伸ばして特定の分野に秀でた人も多く、アインシュタインやエジソンは、その代表例。海外では、それを生かして革命的な業績を残す人が大勢いるのですが、日本では残念ながら、「生きづらい」「居場所がない」という声が聞こえています。

世界最先端の研究が進行中
共生のために多彩な試みを

横並び社会の日本では、周囲と同じでない人は排除されやすく、多様な個性を持つ子どもを受け入れられる土壌が整っていないと言いつても言い難いのが現状です。そのため小中学生の多感な時期に自尊心を傷つけられてしまうと、気持ちがどんどんネガティブになり、それが成人後に影響。うつ病などの精神疾患に繋がることがあります。

ただし、早い段階で障害に気づいてみんまで支えてあげることができれば、その子が学校に不適合となるのを防ぐことができますし、大人になってからのリスクを減らすことだって可能です。金沢大学附属病院では、「子どものこころの診療科」で幼児から中学生までの発達障害や神経症の診療・研究を行っています。また、県や市町には発達障害支援センターなども設けられていますから、悩みを抱えている方はぜひお気軽にご相談いただければと思います。

発達障害は一人ひとり千差万別ですから、とあるやり方で過去に支援に成功したとしても、それが他の子どもにも通用することはあまりありません。個々に応

じた環境整備を、病院・学校・行政・福祉などが手を取り合って考えていく必要があります。

また、親御さんへのサポートも大切ですね。発達障害は、脳の一部の機能に先天的障害があつて生じるものなのに、親の育て方が原因だという誤解が今も残っています。それに、重症児の育児の困難さは並大抵ではありませんから、社会の理解を促すのはもちろんのこと、保護者を支える体制の充実化も重要だと思います。

多様性を受け入れ難い日本
早期診断でより良い将来を

一人ひとり状況が違う発達障害を解明するべく、金沢大学は今、最先端の研究に挑んでいます。民間企業などの連携の下に、金沢テクノパークの一角に世界最新鋭の「幼児用MEG(脳磁図計)」を設置。これらの機器を使ってASD児の脳に多様性が生じるメカニズムを究明し、診断システムの開発に繋げようとする試みです。

また、多様性を受容できる社会を目指して、幾つかの取り組みも同時進行しています。コロナ禍で中断がありましたでしたが、市民と科学者がASDについて語り



発達障害の人たちが作った作品が研究室を彩る